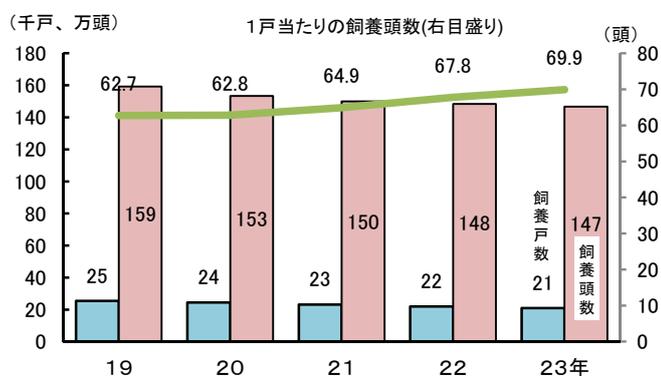


牛乳・乳製品

◆飼養動向

23年2月の乳用牛飼養頭数は147万頭(▲1.1%)

図1 乳用牛の飼養戸数、頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注：各年2月1日現在。なお、平成23年は概数値

乳用牛の飼養頭数は、平成5年以降、減少傾向で推移しており、23年には147万頭(▲1.1%)と前年度をわずかに下回った。

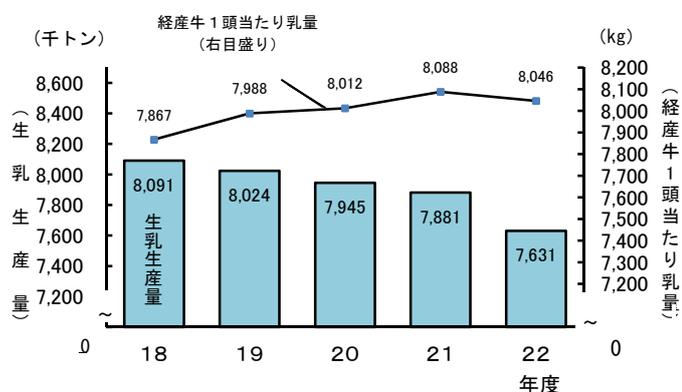
飼養戸数は、飼養者の高齢化による経営中止に加え、配合飼料価格の上昇による収益性の低下の影響などを受け、23年には前年度を900戸下回る21,000戸(▲4.1%)となった。

こうした結果、23年の1戸当たりの飼養頭数は、前年度をやや上回る69.9頭(3.1%)となった(図1)。

◆生乳生産量

22年度の生乳生産量は763万1千トン(▲3.2%)と前年度を下回る

図2 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量(全国)



資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」及び「牛乳乳製品統計」

注：平成22年度の生乳生産量、経産牛1頭当たり乳量は概数値

生乳生産量は、平成8年度には約870万トンを記録したが、その後都府県での減少により、低下傾向で推移してきた。20年度は、飼料価格の上昇などにより、主に都府県の酪農家数が急激に減少した影響から、794万4千トン(▲1.0%)と20年ぶりに800万トンを下回った。21年度は都府県で減産が続く中で、飲用牛乳の消費低迷も加わり、788万1千トン(▲0.8%)となった。また、22年度は、口蹄疫の発生、夏場の猛暑、東日本大震災の発生などの影響で全国的に生産量が減少したことで、763万1千トン(▲3.2%)と3年連続で800万トンを下回った。一方、全国の経産牛1頭当たり乳量を見ると、22年度は猛暑の影響で4年ぶりに前年度を下回り、8,046キログラムとなった(図2)。

牛乳等向け処理量

22年度の飲用牛乳等向け処理量は、8年連続減少し411万トン(▲2.6%)

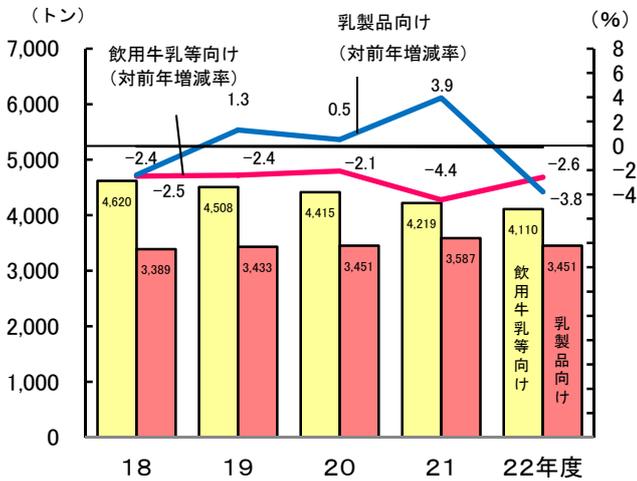


図3 用途別処理量

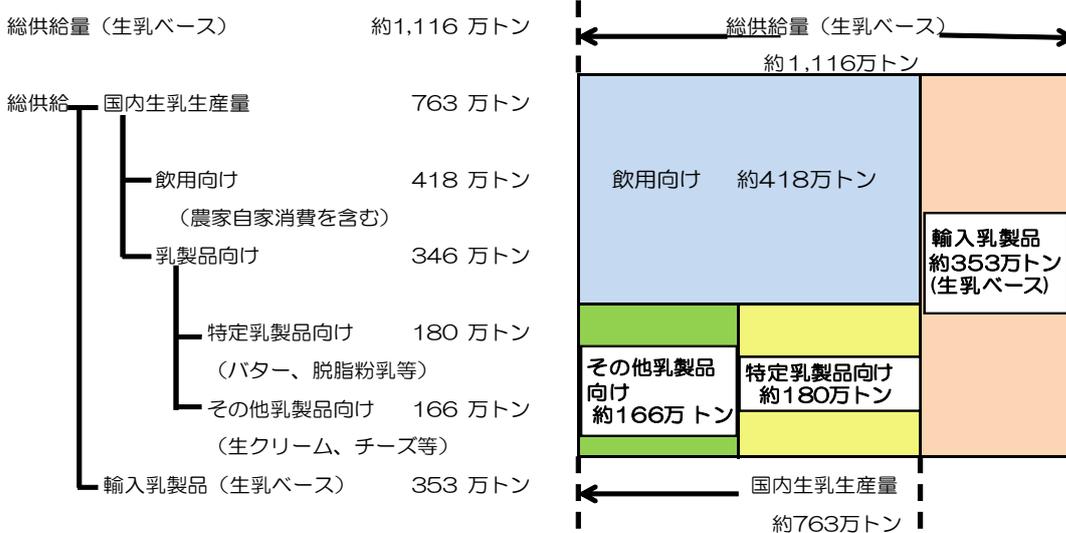
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：平成22年度は概数値

飲用牛乳等向け処理量は、その消費動向を反映して推移しているが、その他飲料との競合などから消費が伸びず、平成6年度をピークにおおむね減少傾向で推移している。20年度は低脂肪牛乳などの成分調整牛乳の需要が拡大し、乳飲料の生産量が前年度を上回ったものの、引き続きその他飲料との競合により消費は伸び悩み、441万5千トン(▲2.1%)と前年度をわずかに下回った。21年度は天候不順から減少傾向に拍車がかかり、飲用牛乳等向け処理量は421万9千トン(▲4.4%)とやや下回った。22年度についてもこれまでの長期低下傾向に歯止めがかからず、飲用牛乳等向け処理量は411万トン(▲2.6%)と8年連続の減少となった(図3)。

乳製品向け処理量

22年度の乳製品向け処理量は、4年ぶり減少の346万トン(▲3.6%)

図4 生乳の需給構造の概要(平成22年度)



資料：農林水産省生産局「畜産・酪農をめぐる情勢」
注：四捨五入の関係で、必ずしも計が一致しないことがある

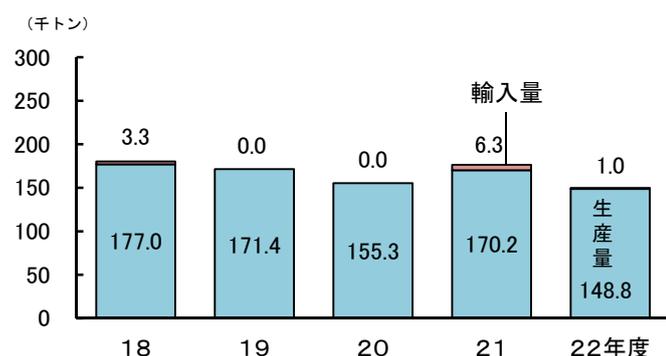
牛乳等向け処理量が減少する中で、これまで乳製品向け処理量は前年度を上回って推移し、20年度は、345万1千トン(0.5%)となった。21年度は、10月にチーズ向け乳価が引き下げられたことなどから、358万8千トン(4.0%)と前年度をやや上回った。一方、22年度は、生乳生産量の減少に伴い、346万トン(▲3.6%)となり、4年ぶりに減少に転じた。こうした中、チーズ向け及び生クリーム等向け処理量は、堅調な需要を反映して増加(それぞれ6.9%、6.7%)となった。

こうした結果、22年度の総供給量は、国内生乳生産が763万トン、輸入乳製品(生乳ベース)が353万トン、国内生産量のうち、飲用向けが54.8%、乳製品向けが45.3%となった(図4)。

◆乳製品

脱脂粉乳 22年度の期末在庫は前年度をかなり下回り、大口需要者価格は前年度をわずかに下回る

図5 脱脂粉乳の生産量・輸入量

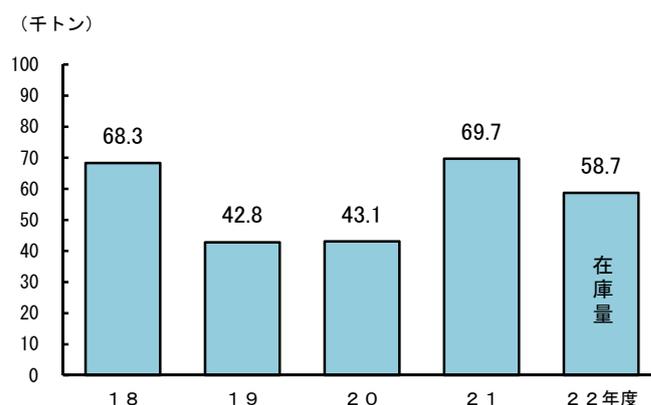


資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注：輸入量は機構輸入分のみ。なお、平成22年度は概数値

脱脂粉乳の生産量は、近年、フレッシュな脱脂濃縮乳に需要が置き換わったことなどを背景に減少傾向で推移している。これに生乳生産量の減少などの要因が加わり、18年度から3年連続で前年度を下回った。しかし、21年度は、牛乳等向け処理量の減少が続く中、長期保存が可能な脱脂粉乳の生産量が増加し、17万トン(9.6%)と前年度をかなり上回ったが、22年度は猛暑などによる生乳生産量の減少のため、14万9千トン(▲12.6%)とかなり大きく下回った(図5)。

図6 脱脂粉乳の推定期末在庫量



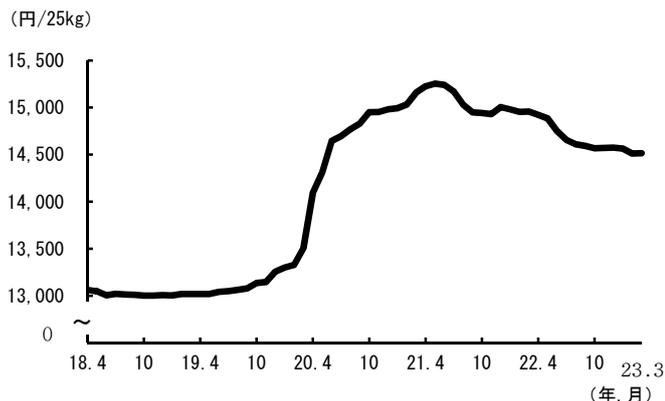
資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

注：19年以降は、農林水産省「牛乳乳製品統計」

一方、推定期末在庫量は、20年度には4万3千トン(0.7%)と前年度をわずかに上回り、21年度は需給の緩和から積み増しが進み、7万トン(61.7%)と大幅な増加となった。22年度は、猛暑などの影響によりかなり大きく減少し、5万9千トン(▲15.8%)となった(図6)。

22年度の推定出回り量を見ると、価格低下による需要の回復などを反映し、16万1千トン(7.4%)と2年ぶりに増加に転じた。また、カレントアクセス分の輸入量は1,009トンであった。

図7 脱脂粉乳の大口需要者価格

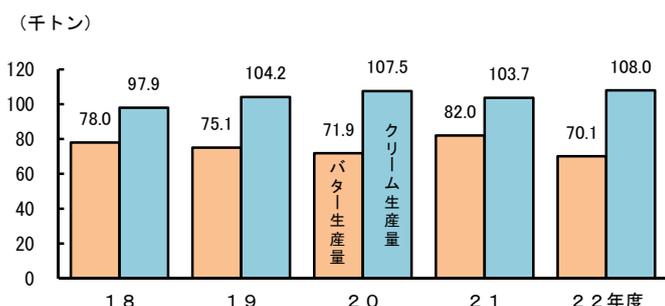


資料：農林水産省生産局調べ
注：消費税を含む

脱脂粉乳の大口需要者価格は、20年度は乳製品の国際需給がひっ迫し、国際価格が高騰したため、国産の需要が高まったことから25キログラム当たり14,785円(12.3%)と前年度を上回って推移した。21年度は在庫量の増加から10月には2年5カ月ぶりに前年同月を下回ったものの、年度平均では同15,054円(1.8%)と前年度をわずかに上回る結果となった。22年度は、前年度を下回って推移し、同14,643円(▲2.7%)となった(図7)。

バター 推定期末在庫量は前年度を大幅に下回り、大口需要者価格は前年度をやや下回る

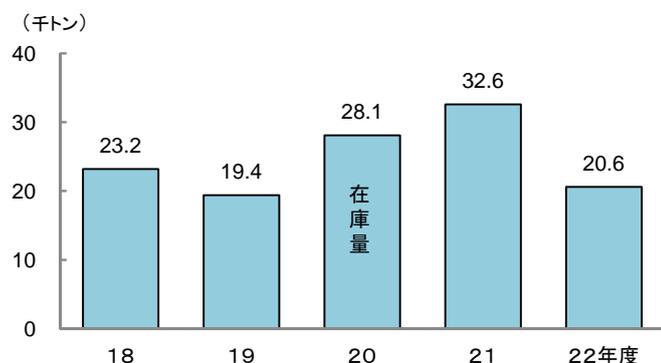
図8 バター、クリーム生産量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：22年度は概数値

バターの生産量は、20年度は生乳生産量が減少する中、クリーム向けが好調だったことを背景に減少し、7万2千トン(▲4.3%)となった。21年度は、乳価値上げに伴う小売価格の上昇から牛乳消費が減少したことにより、バターに仕向けられる生乳が増加したことなどから、8万2千トン(14.0%)と前年より増加した。22年度は夏の猛暑の影響とチーズ・生クリーム向け処理量が増加したことから、7万トン(▲14.5%)と大きく減少した。

図9 バターの推定期末在庫量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ
注：20年以降は、農林水産省「牛乳乳製品統計」

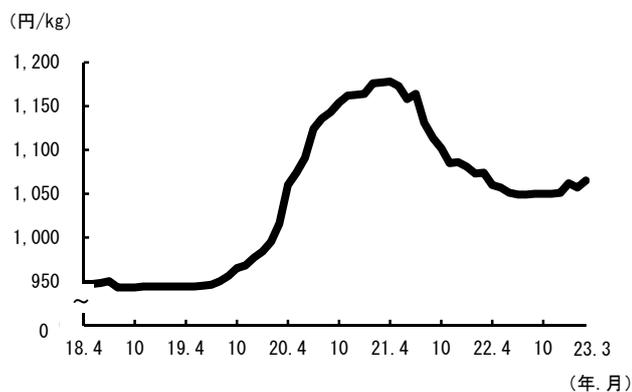
クリーム等の生産量は、18年度以降、業務用向けの需要が好調なことを受け、前年度をかなりの程度上回る水準で推移しており、20年度は10万8千(3.2%)となったが、21年度は景気低迷と低脂肪製品への移行による生クリーム需要の減少などにより10万4千トン(▲3.6%)と減少に転じた。22年度は、コンビニ向けデザート類などの需要拡大を背景に10万8千トン(4.1%)と前年度をやや上回った(図8)。

バターの推定期末在庫量は、飲用牛乳等の需要動向に左右されながら、増減を繰り返して推移しているが、20年度は、景気の悪化により、マーガリンなどへの切り替えが進み需要が落ち込んだことなどから前年度を9千トン上回る2万8千トンと増加した。21年度は生産量の増加により引き続き高い

水準で推移し、前年度を5千トン上回る3万3千トン(16.0%)となった。22年度は、バター生産量の減少などを反映し、前

年度を1万2千トン下回る2万1千トンとなった(図9)。カレントアクセス分の輸入量の実績は1,643トンであった。

図10 バターの大口需要者価格



資料：農林水産省生産局牛乳乳製品調べ

注：消費税を含む

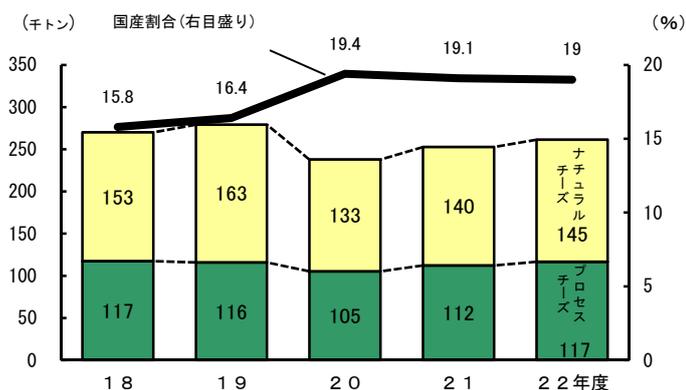
バターの大口需要者価格は、20年度はキログラム当たり1,135円(17.5%)と、海外市場において高値相場が続いたことなどから国産需要が強まり高値傾向で推移したが、21年度は生産量、在庫量ともに増加したことを反映し、低下傾向で推移し同1,118円(▲1.5%)と3年ぶりに前年割れに転じた。22年度は、ほぼ横ばいで推移したものの年度平均では同1,054円(▲5.7%)と、2年連続で前年割れとなった(図10)。

◆チーズ

22年度の総消費量は前年度をやや上回り、26万1千トン(3.5%)

チーズの総消費量と国産割合

図11 チーズの総消費量と国産割合

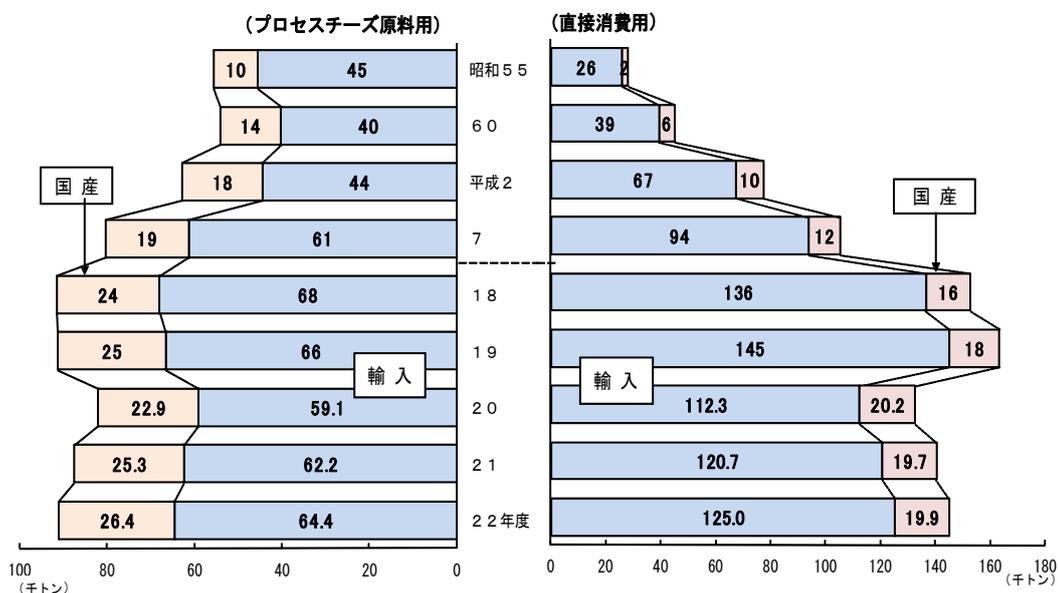


資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

チーズの総消費量(ナチュラルチーズとプロセスチーズ)は、増加傾向で推移していたが、20年度は国際価格高騰などに伴い価格改定や容量変更が行われた上、世界的な経済不況により家庭用や外食用の消費が冷え込んだことから、23万8千トン(▲14.8%)と10年前の水準(10年度23万4千トン)まで落ち込んだ。21年度は、国際価格が下落し輸入量が増加したことや、製品価格の値下げと内食化の進展もあり需要は回復し25万3千トン(6.2%)と2年ぶりの増加となった。22年度は、ナチュラルチーズが3.2%、プロセスチーズが3.9%と、ともにやや増加したことにより26万1千トン(3.5%)となったが、過去最高であった19年度と比べると94%の水準にとどまった。プロセスチーズの消費量は、18年度以降3年連続で前年度を下回ったが、21年度は11万2千トン(6.6%)と増加に転じ、22年度は11万7千トン(3.9%)と2年連続で増加した(図11)。

ナチュラルチーズの生産量・輸入量

図 12 ナチュラルチーズの生産量・輸入量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

直接消費用ナチュラルチーズ(プロセスチーズ原料用以外のものを指し、業務用その他原料用を含む)は、18年度以降2年連続で前年度を上回って推移していたが、20年度は、秋以降の世界的な景気失速に伴う不況で家庭用や外食用の消費の落ち込みが大きく影響し、13万3千トン(▲18.8%)と大幅な減少となった。21年度は14万トン(6.0%)と前年度から一転して増加に転じ、22年度は14万5千トン(3.2%)と2年連続増加したが、この水準は15年度をやや下回る水準にとどまっている。

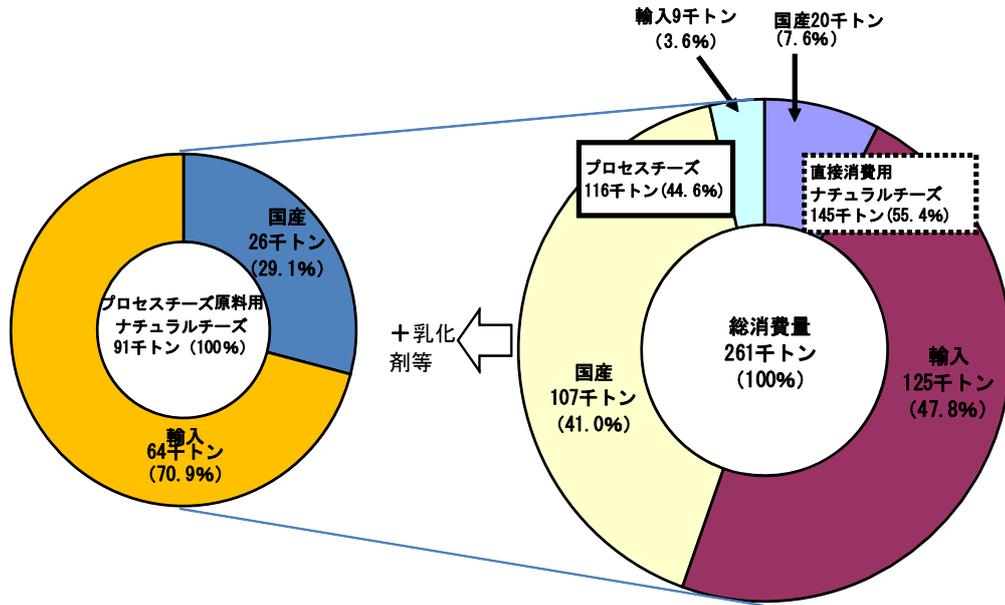
国産ナチュラルチーズの生産量は、堅調な需要の拡大を背景に17年度以降増加傾向で推移し、22年度は4万6千トン(2.7%)と、北海道のチーズ工場が生産能力を強化したこともあり、18年度から6年連続で前年度を上回った。このうちプロセスチーズ原料用は、おおむね2万トン前後で推移し、22年度は2万6千トン(4.4%)となった。一方、直接消費

用は、17年度以降着実に増加し22年度は2万トン(0.6%)とわずかに増加した。

ナチュラルチーズの輸入量は、おおむね18~20万トン台で推移しており、22年度は直接消費用は12万5千トン(3.6%)、プロセスチーズ原料用は6万4千トン(3.5%)といずれも前年度を上回って推移し、18万9千トン(3.6%)と2年連続で増加した(図12)。

チーズ総消費量

図 13 22 年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

注：直接消費用ナチュラルチーズとは、プロセスチーズ原料用以外のものを指し業務用その他原料用を含む。以下のグラフについても同様

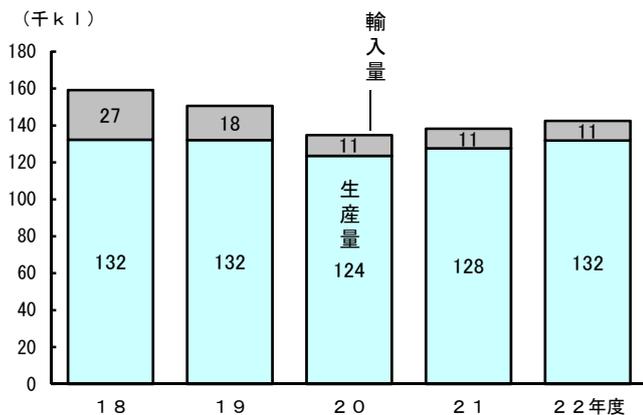
22 年度のチーズ総消費量における国産チーズの割合は 19.0%と前年度より 0.1 ポイント低下した一方、プロセスチー

ズ原料用に占める国産の割合は 29.1%と 0.2 ポイント上昇した(図 13)。

◆アイスクリーム

22 年度の生産量はやや増加の 13 万 2 千 KL (3.3%)

図 14 アイスクリームの生産量と輸入量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」

注：輸入量は、1t=1.455kl で換算。なお、平成 22 年度は概数値

アイスクリームは、近年、豊富な品揃えにより、女性を中心に購買頻度が高まっている。生産量は、20 年度は 12 万 4 千キロリットル(▲6.4%)と前年度を下回って推移したが、21 年度は 12 万 8 千キロリットル(3.3%)と 3 年ぶりに前年度を上回った。22 年度は、13 万 2 千キロリットル(3.3%)とやや増加した。輸入量は、17 年度以降減少傾向で推移しており、19 年度は輸入価格の上昇を背景に、前年度を大幅に下回る 1 万 3 千トン(▲31.2%)となった。それ以降、20 年度は 7 千 7 百トン(▲39.2%)、21 年度は 7 千 3 百トン(▲5.7%)、22 年度は 7 千 3 百トン(▲0.2%)と 3 年連続の減少となった(図 14)。